

東京都立中央図書館加賀文庫蔵 『物草太郎』 翻刻

(翻刻／網野 可苗)

〔外題〕 物草太郎 (書、貼、後)

〔内題〕 (なし)

〔柱題〕 ものくさ

〔刊写〕 刊

〔数量〕 1冊15丁

〔作者〕 富川房信 (画)

〔その他〕裏表紙に書入あり (去御方／御好ニ付／雅 (ママ) 衆忠臣蔵 全三冊／十返舎／一九自作)

(1オ)

むかし信州重柳村に物ぐさ太郎といふものあり。つまにおくれしよりうきよをものうく思ひ、ゆてうずもつかわずひげもそらずかみもゆわずきぶしやうにぞくらしける。アゝかしましいとりではあるぞ。

物ぐさ太郎百性にやとわれ鳥をおふ。

(1ウ)

物ぐさ太良はやどへかゑりても、しよくじもにやき水くむもめんどうなりと、うちふしてくらしける。里人あわれみだんごやきめしなどをやれば、よろこびてたまにとりなどしてたわむれとりはづし、おとせばそれをとる事をむづかしがり、ながさをにてかきよせんとするうち

(2オ)

いぬからすすゞめ、かのやきいゝをとらんとちかよるを、ながきさおにておいちらしける。さと人みておかしがる。

カア／＼

チウ／＼

信州安曇郡穂高組重柳村

(2ウ)

物くさ太良いつものごとく百姓にやとわれわがやゑのかゑるさ、しろきつね人におわれしにてしを／＼と

(3オ)

たのむふぜいゆへふびんに思ひかくしける。

こゝに横嶋久蔵とかりうど、しろきつねのいきぎもとらんとおつけ来る。

(3ウ)

けらう人め、なぜきつねをにがしおつた。
よこじま久蔵、物ぐさきつねをにがせしゆへ、おふきにいかりさん／＼にぶちのめす。
あいた／＼…(※破損にて判読不能)

(4オ)

その年田をうゆる比、やといのさおとめのうちにひとりうつくしき女あり。いねをうゆるに二三人はたらきありしかば、物ぐさ太良ふと思ひそめくどきける。
なるほどめうとなりやんしよ。
さふいふてあとでわるわふでの、ほんの事ならうれしい。

(4ウ)

かくてさおとめは物ぐさ太良とふうふになり、ひげさかやきをそりゆをつかわせしかば、村ぢうにならびなきびなんとなりしゆへ、いよ／＼むつましくちぎりをむすびけり。
ほんにさかやきそつてみたら、よいおとこにならんした。
うれしや／＼とんと…(※破損にて判読不能)
ひさしぶりてさかやきした「が」、さつはりとしてよいぞ。

(5オ)

物ぐさ太良ふうふ中むつましく男子壱人もうけ、てうあいあさからず、はや三才にぞなりける。ある日はたけよりかへりて、女ぼうがきるものゝすそよりきつねの尾みゑしをみつけしが、女ぼうそへぢしてぜんごもしらずねいる。ひそかにそのばをさりてあらたにかへりたるていにてさわがしくうちにいりければ、女ぼうおどろきめをさましける。

(5ウ)

物ぐさ太郎さあらぬていにて女ぼうといよ／＼むつましくせしに、はつかしくやおもひけん、おつと物ぐさが又野へいでしるすの内、きつねのすがたをあらわしわが子にわかるゝをかなしみはなれがたなくなげきしが、よう／＼におもひきりわがすむのべにかへりける。
物ぐさ太郎…(※破損にて判読不能)
かゝさまいのふ。

しのぶ身はすゝきのほにもおどろきぬよるのとのゐにこゝろひかれて

(6オ)

物ぐさ太郎わが子をつれ、くさむらをおしわけこゝかしことたつぬる。女ぼうおんあいにひかされあらわれ出しが、いづくともなく立さりける。されば物ぐさか一子せいじんの後、大百性となりはんじやうしけるとかや。此子孫の手はみなまるきよしいゝつたふ。たとへやくわんとちぎりしとわるふ人はわらへわれは、ちつともはづかしからず。女ぼうとも…
(※破損にて判読不能)

(6ウ・7オ)

こゝに又あやしき事あり。かづさのなるとむらのほとりに手斧梵論「てをのぼる」といふものいづる。その大きさがたちどもに大工どうくのてうの「と」ことく、鳥むしなどのとぶごとくふらり／＼ととびにぐる也…（※汚損のため判読不能）
あめの夜などにわとりわけはやくいづるよし、人の目のうへはなのさきをゆきかふとかや。てぢかくきたるをとらんとすればよこへき□うへにあか「り」、たゞかけるふに似たり。人にかいなしといへり。

(7ウ)

是もむかしの事とかや、上野国館林堀貝村茂林寺に守鶴「しゆくはく」といふ僧「さう」有。住職「ちうしよく」七代の間納所のことくにして学頭「かくとう」をつとむせきがくにして、一山「いつさん」にならぶ僧なし。おわつて又はじむと書く此手跡のこれりとかや。

(8オ)

ある日こぞうしゆくはくがひるねしているひと間へ用事ありてから具をひらき候れば、大きなたぬきとなり、たかいびきにてふしたりける。

しゆくはくさまがたぬきに、これはく。

守鶴「しゆくはく」せんごもしらずねいる。

(8ウ)

子僧おどろき此よしを物がたるにて、事もないしゆくはくさまがたぬきになつてねてござります。

方丈やうすをきゝ給ひ、此事かねてよりしりたり、かならずさをいたすべからずとせいし給ひける。

(9オ)

守鶴「しゆくはく」めをさまし方丈ゑいとまをねかふわた□…国も…（※汚損のため判読不能）方丈なごりをおしみさまく／＼とゞめ給ふ。

(9ウ)

方丈とめ給へどもしゆく…しやうい…すにて立出…じせつに夜僧に申…（※破れ）わが名ごりにむかし事を見すべしと□ひろにわゑおりたれば、たちまち山海のふうけいとなり、みなく／＼きゑのおもいをなす。

これはきめうく。

(10オ)

讃州八しま元暦の合戦のていあらわれ、くがにはしらはた、海には□舟源平のたゞかい、しばらくありて事おわりぬ。

(10ウ)

なをも佛在世のていをのぞまれければ、いとやすしとて靈鷲山「しやうじうせん」説法のし

だいかやう双林の入滅ことくくあらわせり。みなくころよいにてつし、くわんねんの内たちまちきへうせける。みなくおさらば。

(11才)

其後守鶴は古道具見せ多きたり、ふるてのちやがまお金十両にてもとめける。よいおちやあがりませ。やすふあけました。

(11ウ)

どぶぐやのていしゆ、しゆくわ…木「」の葉「は」ゆへあきれる。たしかに金であつたがきもがつぶれる。これはどふだ。ゆだんのならぬ事じや。

(12才)

それより道ぐやのていしゆ、やうくおいつき金子まちかいといふ。守鶴すこしもさわぐけしきなくあいさつしてかへす。これは茂林寺の守鶴「しゆくわく」なり。おつつけまことの金子いちばいにしてつかわすべし。

(12ウ)

それよりも守鶴「しゆくわく」は茂林寺多きたり、ちやがまを方丈多上る打□□にてちやがまへちさん仕りました。めづらしやしゆくわくほうし、ゆるりととうりうめされい。

(13才)

方丈かのちやかまをいろりにかけさせ、よきちやをいれせんちさせ給ふに、いちど水をさせば五七日かほとわき出てみづをさす事なし。つねにふんぶくくとたぎりける。ふんぶくくときこへます。

(13ウ・14才)

守鶴「しゆくわく」心よくねいりしうち、たぬきはすがたをあらわし、大ぜい…(※破れ)ふんぶくしゆくわく…(※破れ)これよりしてふんぶくちやがまのもちぬしにけがはへたとはやしける。ふんぶくちやがまにけがは多たく、おかしいく。

(14ウ)

茂林寺の境内に太々羅「沼」といふぬまありあしがやの中に毎年鶴「つる」子を産「う」み、

ひなづるやう／＼じざいをなすころ、おやづるくたんの子をつれて茂林寺にとびきたり、五十日三十日がほどをへて、おやつるは太々羅ゑかへりひなづるはいつくともなくとびゆくなり。

おや鶴毎月の式日本堂の

(15才)

本尊ゑ札をなす事きめうなり。

守鶴「しゆくわく」の筆跡に、おわつてまたはじむと書たり。しかれば、此つるしゆくわくがれいこんなるべしといふ。住僧智恵「ちゑ」あさければ来らずとかや。

(15ウ)

いなりの社は白狐をまつるなり。空海「くうかい」いねをになゑる老人にあい給ひしより、飯生を是より稻荷「いなり」と書かへ、ちんじゆとあらせたまふ。

つるは千年のことぶき、はねにほがさきほにほさく。げにゆたかなる春のはしめ、お子さま方御ぞんじのむかし伝をとりあつめ、□困川か筆にさかせ桜木にひらくしん板とはなしぬ。

*『物草太郎』翻刻にあたり、快く許可して下さいた東京都立中央図書館加賀文庫に厚く御礼申し上げます。